説教の課題
—信仰とコミュニケーション—

船　本　弘　毅

I．はじめに

イエスの伝道が，カペナウム[1]で開始されたことはほぼ確かである。カペナウムは地中海より水位が210メートルも低い。そのため夏は非常にむし暑く，イエスの時代，はえと蚊の大群がこの地をさまざまな病気の繁殖地にしていたと言われている。住民の多くは貧しい小作人であった。イエスはこのような貧しい，病める，助けを最も必要としている人々の所へ出かけて，隣人となられたのであった。

マルコによる福音書によれば，イエスは安息日に会堂に入って教えられた。そして人々はその教えに「驚いた」と記されている。なぜなら，イエスは律法学者たちのようにではなく，権威ある者のように，教えられたからであった[2]。

ユダヤ人たちはどのような境遇にあっても安息日を守った。したがって，彼らは律法学者たちの教えには聞き慣れていた。しかしそれは彼らにとっては，知識にすぎず，生命のひびきを持ってはいなかった。しかし，イエスの言葉には権威があったのである。聖書の語る「権威」は，単なる力，外的な見せかけの力ではなく，いわゆる権力とは質を異にするものであった。権威の原語は「エクスーシア」であるが，これは「エクス」，〜から外へと，「ウーシア」，存在するという語から成る言葉であり，他人や物に束縛されないで自由に行動できること，さらに他人や物を自由に動かし，支配する力を持っているということを意味した。したがってそれは，真の自由と力が結び合って生じる権威であった。

ガリラヤ湖畔に住むイスラエルの人々は，イエスに接し，その言葉を聞くことによって，そこに真のコミュニケーションが成立し，伝統や習慣，また人間や物に束縛されない真の自由と解放を感じ、同時にこの主に従わずにはおられない力を感じたのであった。

福音とは，まさにそのようなものである。信仰はわれわれを束縛し，制約し，閉じ込めるようなものではなく，むしろわれわれを自由にし，解放してくれるものである。そして信仰者は，主の招きに自からの自由な意志で，喜びをもって応答し服従するのである。

「また，からだを殺しても，魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ，からだも魂も地獄で滅ぼす力のあるかたを恐れなさい」（マタイ10：28）

イエスはこのような権威を持つ存在であり，その語られる言葉は平易な言葉であったが，人々の心に権威ある言葉として受けとめられたのであった。

II．説教とは何か

説教とは何か。これは大きな問いである。広辞苑によれば，(1)宗教の教義・趣旨を説き聞かすこと。教理を説いて人を導くこと。(2)かたくるしい教訓的な話などをあざけっていう語，と説明されている。それは余り良いひびきを持たない語である。

しかし本来，キリスト教の説教は，喜びの知らせ（ユーアンゲリオン）が語られ，聞かれる所に成立する福音の宣教という意味を持っている。「説教」と訳し得る用語は，新約聖書の中には数種類あり，それぞれ次のような意味を持っていた。

1）マルコによる福音書１章21節以下参照.
2）マルコによる福音書１章22節.

「ユーアンゲリオン」福音，良きおとずれ。「アナンゲレイン」宣言する，告示する。「アパンゲレイン」命令する。「カタンゲレイン」宣伝する。「ケリュグマ」使信，「ケリュッセイン」戦勝報告をする。これらの用語に共通していることは，良いニュースを宣伝する，言い広めるということであり，かくれてこっそりと語られることではなく，大声で堂々と語られること，ということである。

したがって，説教とは本来，イエス・キリストの救いのおとずれを，何よりも喜ばしいニュース，喜びの良き音信として，公やけに，特に公同礼拝において明かにし，宣言することであった。それは人間の知恵による言葉ではなく，神がなしてくださった恵みの業の出来事についての証言のことばを伝えることである[3]。すなわち説教は，神について，あるいはイエス・キリストについて語るのではなく，神の行為，すなわち，神のなしたもうた恵みの業を告げるということである。神が何をしてくださり，イエス・キリストが何をなしてくださり，イエス・キリストにおいて何が出来事となったのか，その事実・出来事を証し，伝えることが説教である。

カール・バルトは，説教とは徹底した啓示への服従の業であると述べている。それは，「神は御自身を啓示した」（顕現）と「神は御自身を啓示したもうであろう」（再臨）という二つの啓示の出来事の間に位している。そして説教の出発点は，神が御自身をわたしたちに啓示したもうということの中にあると言うのである。

説教はしたがって，神の存在を証明する人間の試みでもなく，また神のリアリティーをそれを通して確立することでもない。神は自からご自身をあらわしてくださるのである。それゆえに，説教は聖書について語るのではなく，聖書から語ることになる。

したがって，説教は約束の成就・再臨という面を持っている。キリストが再び来たりたもうことを指し示すのである。その意味で説教は，すでに来たりたもうた方を信じ，来たるべき方を指し示す務めを担っているということができる。

説教はしたがって，聖書と深く結合する。端的に言って，説教は聖書の説き明かしである。聖書のことば，イエスの語られたことばは，その時と所において，人々にはよく分かり，理解できた言葉であった。信じるか否かは別として，それは人々によく分かったのである。したがって，説教は聖書のことばを，現代に生きるわれわれへの語りかけ，またよく分ることばとして取り継ぐという使命を担っている。

そして説教は，聞く者にその言葉を信じるか否かの決断を迫るのである。言うまでもなく，説教者は福音に固有のつまずきを取り去ることは出来ない。イエスでさえどうにもならないつまずきが福音にはあるのであり，それを取り去ろうとすることは反って傲慢である。しかし，福音以外のつまずきは取り去らねばならない。分かりやすい言葉，ひとりよがりではない言葉，現代人に通じる言葉で説教は語られねばならない。

真実の説教が語られるところに教会は基礎づけられ，建てられる。そして真実の説教は，人間の知恵や美しい言葉によるのではなく，キリストの福音が真に喜びの音信として語られる所に成立するのである。

Ⅲ．説教の本質

イエスの生涯は，単に歴史的事件として十字架，復活，昇天という一連の事件で終わったのではなく，教会に受けつがれた。「キリストの人格は地上の彼のからだ〈教会〉の歩みに受け継がれている。キリストの死と復活というこの〈救いの力〉は，それがどのように決定的な効力を持つものであるとしても，単に過去の歴史の特殊な事実であるのではなく，教会の経験の中で，再び演じられているのである」[4]。

そして教会を通して受けつがれていく神の救いの業は，具体的には説教を通して遂行される[5]。パウロによれば，神の救いの業は，説教とその説教に聞き従う信仰において生じるのである。

3）コリント人への第1の手紙2章1－2節参照.
4）C. H. Dodd : *Apostlic Preaching and its Development*. p. 62.
5）コリント人への第2の手紙5章18-19節参照.

「神は，宣教の愚かさによって，信じる者を救うこととされたのである」（第1コリント1：21）

「……こととされた」と訳されている語（ユードケオー）は，新約聖書における用法に従えば，「決心する」，「同意する」，「欲する」と言った意味を持っている[6]。すなわち宣教を通して信じる者を救うのが神の決意であり，意図であり，また神の欲したもうことであった。別の言葉で言えば，宣教はイエス・キリストにある神の救いの業であり，神の言葉の説教においてキリストは現在したもうのである。

説教にはいろいろなタイプがある。モティーフから伝道説教と礼拝説教に分けられ，その様式から主題説教と聖書注解説教とに分けることもできる。聖句説教（テクスチュアル）と講解説教（エクスポジトリー）という分類の仕方もある。礼拝についての名著の中でアバは，講解，教理，倫理，弁証，主題，伝道という六種の説教分類法のあることを述べている[7]。

説教の問題を考える時，こうした区分の探索も必要であるが，その共通点はより重要であろう。すなわち，説教はいずれの形態をとるにしても，キリストの福音を語るのであり，キリストの出来事において明かにされた神の審きと恵みとが語られねばならない。

説教の内容とその中心とは，十字架と復活のキリストである。その意味で説教はすべて聖書説教であるということも可能であろう。どんなに美しい言葉が語られ，どんなに鋭い社会分析がなされ，どんなに聞く者の心を打つ感動的な体験が語られたとしても，キリストが本当に指し示されていないなら，それは説教とはなり得ないであろう。しかしそのことはただ聖書のことばを注解し，イエス・キリストの名を御題目の如く唱えることを意味しない。説教は聖書に基づきつつ，今，ここで，具体的には20世紀の後半の日本における聖書の証しであり，今日のわれわれの生活の座を明かにしなければならないのである。したがって世俗社会の具体的な諸問題を自分の問題としてこれを聖書に問うことが出来るのであり，説教はこの日本の現実の中でごまかしなく生きられる聖書の福音の証しでなければならない。

この意味で説教は個性的である。説教者自身の聞きとった神のメッセージ，説教者を砕き，生かし，支える神のことば，すなわち「わたしの福音」が力強く，また喜びと感謝をもって語られるのが説教である。しかもそれは自己流のわたしの説教ではなく，わたしを越えたイエス・キリストの福音である。

このわたしを越えかくされている面は，サクラメントとなる。説教はサクラメントと結びつき，礼拝を形成する[8]。このところにおいて説教は恐れなく，大胆に語られ得るのである。キリストの過去の一回的出来事を指し示す説教と，今ここに働く神の現在を明らかにする聖餐とは，互に他を必要とし，かつ相手を目指している。サクラメントを離れて説教は真の意味で成立せず，サクラメントを目指さぬ説教はあり得ない。エマオ途上の弟子たちは，聖書の説き明かしを聞いて心が内に燃える体験をした。しかしそれを自覚したのは，パンを取り，祝福してさき，彼らにわたされる主との出会いにおいてであった[9]，とルカは記している。われわれはサクラメントにおいて「汝」と呼びかけてくる主と相対する。そしてサクラメントは，神の言葉のもつ全領域を明らかにする。そしてサクラメントがあることにおいて実は説教は，その本来的な機能を正しく行使することができるのである。

Ⅳ．説教とコミュニケーション

6）ルカによる福音書12章32節，ガラテヤ人への手紙1章15節，テサロニケ人への第一の手紙2章8節，3章1節など参照.

7）レイモンド・アバ著，『礼拝』——その本質と実際——，p. 85.

8）大学における礼拝では，通常サクラメントを伴わない礼拝が行なわれる．時間的制約，場所の問題に加えて，出席者の大半が信者でないことを考えると，これは止むを得ないことと言わざるを得ない．教育的プログラムの要素を多分に持つ学校礼拝においては，説教を中心とした礼拝が守られるのは当然であり，これは礼拝として大切に守られるべきであり，チャペルとかアッセンブリーと言い変えることによって，礼拝的性格を薄めたり，福音の宣教を遠慮する必要はないと考える．しかしそのことは，サクラメントの意義をいささかでも軽視したり，無視したりすることではない．背後の教会の祈りに支えられつつ，学校は礼拝を守るのである.

9）ルカによる福音書24章30-31節参照.

説教においてわれわれは神の語りかけ，神の恵みの宣言を聞く。説教は説教者の知恵や体験，人生観を語るのではなく，神がイエス・キリストにおいてなしたもうたこと，すなわちケリュグマを告げるのである。そして神の言葉は，語られるということが本質的な性格であり，語りかけ（Anrede）として固有な意味において聞かれる時にのみ，神の言として理解されるのである[10]。

語りかけ，呼びかけとは，元来人格的なものであり，個々の実存と関わりを持つ。ことばは人間がその心の中に抱く思いや感情を相手に伝え，知らせ，分からせる手段である。そしてことばは語る者と聞く者との間にコミュニケーションを生じさせ，そこに交わりが成立する。説教もまた具体的な相手をそこに予想し，その相手の態度決定を呼びおこすものである。すなわち説教は，ある思想を強要したり，一方的・独断的な独語をするのではなく，自由な語りかけであり，そこに交わりが生じるのが，その本来的な性格である。

シュライナーは，説教は神と聴衆との間に「我と汝」の関係を作り出すとして，その関係を次のように説明している。(1)，神の言葉を聞く時，我は他者なる実存に対して立つ。(2)，我に対する他者は無条件的な主権をもって我に対している。(3)，説教は他者なる実存の現在性の性格をもって語りかけてくる[11]。

これが説教の生み出す状況である。そして説教の権威もまたここにある。人間のことばとしての説教は不十分であり，破れが多い。しかし説教は，昨日も今日も永遠に変わることなく生きて働きたもうイエス・キリストとの現実的，人間的な交わりをもたらす任務を担っている。説教はイエス・キリストについて語り，説明するのではなく，キリストそのものを指し示し，キリストご自身を説かねばならないのである。

人生論的な説教が，しばしば語られる。そこでは，われらの友となり，われらと共に生きた人間イエスが語られる。これは確かに分かりやすい。われらと共に悩み，疲れ，怒り，喜び，そして涙したイエスの姿に，聞く者は親近感を覚え，安らぎを感じるかも知れない。しかし，われわれはここに留まりうるのであろうか。初代教会の弟子たちは生前のイエスを知り，イエスと共に生き，働いた体験をもっていた。しかし，彼らは顕現のイエスにおいてキリストの復活を信じ，そこからイエスの言葉と行為とをあらためて，真に理解したのではなかったであろうか。

「それだから，わたしたちは今後，だれをも肉によって知ることはすまい。かつてはキリストを肉によって知っていたとしても，今はもうそのような知り方をすまい[12]」

これは使徒パウロの決意であった。あらわれたキリストに捕えられて，彼は復活の証人となったのである。

弟子たちは皆，イエスが捕えられた時逃げ去った者たちであった。代表格であったペテロはイエスの裁判が行なわれていた官邸で，「その人のことは何も知らない[13]」と，イエスとの関係を強く否定したのであった。しかし彼らはイエスの復活において再び集められ，主の復活を信じて新しく生きる者に変えられたのであった。そして弟子たちはここに一切をかけたのであった。死人を甦えらせる神，無から有を創造したもう神，全教会と全歴史を貫く神，イエス・キリストにおいて啓示された神に、一切をかけたのであった。

説教はその意味では，見えない霊的な世界を現実に理解せしめるという課題を担っている。そして説教の権威は，この課題を担うことにある。すなわち，神が生きておられる，この世界の主は，われわれ人間ではなく神である，ということを告げるところに真の説教の権威が存するのである。今日のわれわれの教会は，この意味で説教の固有の権威を失っているのではないであろうか。

説教は言うまでもなく，現代に生きるわれわれへの神の語りかけである。しかし「現代に」ということが問われる時，われわれの目は容易にこの世の現実，この世の求めるものへと向けられていく可能性を持っている。説教はすでに述べたよう

10）R. Bultmann : Der Begriff des Wortes Gottes im Neuen Testament., *Glauben und Verstehen*, v. I. s. 268–293.
11）Helmut Shreiner : Die Verkündigung des Wortes Gottes.
12）コリント人への第二の手紙5章16節.
13）マタイによる福音書26章74節参照.

に，この時代を離れては成立しないし，この時代に生きる具体的な個々人へ向けて語られねばならない。この世のいかなる問題も説教にふさわしくないものはなく，説教の内容から排除されはしない。しかしそのことは，この時代の要求に迎合することではなく，またこの世の問題に必ずしも直接的に答えることではない。説教者は福音を通してのみ答えるのである。

教会が時代から遊離しないように，説教が人々に訴える強いメッセージであるように，そして皆んなに喜こんでもらえるように心を労し，気のきいた時評的説教や人生論的説教にとどまっているとしたら，問題は深刻であると言わねばならない。説教の意義はこの時代の要求に答えているかどうかに存するのではなく，おかれている時と所で真に主のことばを聞いているかどうかにかかっている。時代が教会に真に求めているもの，そして教会がこの時代のただ中で語り伝えること，それは昔も今もイエス・キリストの喜ばしい出来事にほかならない。そしてそれが単なる過去の出来事を今に伝えるということに留まらないで，また知識としてのことばとしてではなく，わたしを生かし，わたしを力づけているキリストの恵みの現実として証しされていかねばならないのである。

説教はそれゆえに，聞く者に信じるか否かの決断を迫って来る。すでに述べたように，説教者は福音の固有のつまずきを取り去ることはできないし，それを取り去ろうとしてはならないのである。

「わたしにつまずかない者は，さいわいである[14]」

説教がこの時代の人々に訴えるものとなり，理解されるものとなるために，説教者は福音以外のつまずきを取り去るための努力と修練が求められるであろう。そこでは現代の社会科学の助けを借りねばならないであろうし，説教者は自己訓練を怠ってはならない。そして取り除きうるつまずきが除かれ，信じるか拒否するかの責任が聞く者の側に生じるまでに福音を明らかにする務めが課せられるのである。これは実に厳しい説教者の課題である。そして説教者の務めはここで終るのである。それを越えて，無理矢理押しつけたり，聴衆を納得させようとしてくどくど説明したり，感情に訴えることは誤りである。なぜなら，信仰は，それを受け入れるのも，拒否するのも自由な主体的な決断だからである。

この自由は，語られることばにおいて主が働きたもうということである。説教はかくして聖霊の業であるということができる。聖霊の働くところで，説教者も聴衆も共にひとりの信徒として，共にみことばに聞き，信じ，告白し，主の御名を讃美するのである。

V．説教の課題

プロテスタント教会は，その成立当初から説教を重んじて来た。説教についての古典的書物と言いうる『積極的説教と近代精神』[15] の冒頭で，フォーサイスは，「あえて言うならば，キリスト教はその説教によって立ちもし倒れもする」と率直に語っている。これはプロテスタント教会の立場であり，特に日本の教会はそうであった。

しかし今日，説教の評判は必ずしも良くないのである。あるいは説教がその力を失っていると言えるかも知れない。

現代の説教についてなされる批判の中で圧倒的に強い声は次のようなものであろう。(1)，今日の説教が現代の生きた問題とかかわりがなく，現実から遊離した傾向にある。(2)，説教が現代のことばとしての意味を持っていない。(3)，その結果，時代に対する強いメッセージがない。

くり返し述べたように，説教とは，「今」，「ここ」において，いきた神のことばを語るということである。2000年前のイエス・キリストの出来事を，聖書から聞き，現代世界に生きる人々に証しするのが説教である。現代社会のただ中に生き，働き，悩み，苦闘している人々にとって，教会で語られる説教が頭の上を素通りしていく空虚なことばになっているとしたら，これはまさに教会にとっても，キリスト教にとっても，致命的な問題であると言わざるを得ない。

「十字架の言は，滅び行く者には愚かであるが，

14）マタイによる福音書11章6節，ルカによる福音書7章23節.
15）P. T. Forsyth ; *Positive Preaching and the Modern Mind.*

救にあずかるわたしたちには，神の力である[16]」

福音は信じる者には神の力である。神の言葉は新生の力である。神のことばの深い真理を説教者がとらえて語る時には，聞く者にそれが生きる力となり，新しい生き方へと導いて行くのである。説教は何よりも福音——喜びの音信——の単純な語りかけである。しかし同時に，信仰は愛を通して働くのであり，新しい具体的な信仰にある生へと目を開かせるものである。

16世紀の宗教改革以来，プロテスタント教会は「信仰のみ」(sola fide) をその基本的な立場として強調して来た[17]。それは歴史的にも神学的にも重要なことであった。信仰は律法の行為や功績としての業とは徹底的に対立する。神の恵みは，すべての人間の業とは関わりなく単独に遂行されるのであり，人間は救われるためには何の業も要しない。ただ信じ，受け入れ，服従するのみである。

しかし信仰の服従は，自由と責任においてなされる人間の決断である。信仰とは単なるケリュグマの消極的な受容・承認に留まることなく，ケリュグマへの自由な主体的な服従である。「恵みによってのみ」，「信仰によってのみ」という信仰は，人間の行為を警戒するのではなく，キリストにあって新しく生きる人間の主体と行為とを真実に問題とするのである。

したがって説教は狭い意味でのキリスト論的説教やドグマティックな説教のみでなく，それに基づきつつ罪を審き，新しい恵みの秩序を創造したもう生ける神を説教し，この世の悪を明かにしなければならないのである。したがって，平和の問題，人権の問題，沼地と言われる日本の精神風土の問題，ニヒリズムの問題，偶像礼拝の罪との対決の問題，生命科学の産み出す問題など，さまざまな事柄が説教の対象となり，内容となるであろう。説教においては，ジャーナリスティックにではなく，常に深い福音の理解から出る鋭い問題の把握と指摘が求められているのである。

イエス・キリストの業は，教会において現在する。神の業は教会に引きつがれて今日に及んでいる。これは主が聖霊において，今，在すということが，説教において起こるということである。キリスト者の希望や待望は，説教において現実となるのである。フォーサイスは先に述べた書物で，「説教は福音を与えたもう神に向かって語られるが，真実は神に向かって捧げられているのである[18]」と述べている。礼拝に集う者は，語る者も聞く者も共にキリストのからだなる教会につらなる肢体として[19]，一つになって神の恵みを語り，神を讃美し，神を礼拝するのである。

教会はその説教によって立ちもし倒れもするのである。真実の説教が語られるところにキリスト教とその教会は生きた力を持つ。そして真実の説教は，キリストの福音が喜びの音信として正しく語られるところに成立する。説教者を支え，力づけ，生かすことばが，喜びをもって生き生きと語られる時，聞く者をキリストへ導き，今，ここで生かす力となるのである。

---

16) コリント人への第1の手紙1章18節.

17)「信仰のみ」の教理がプロテスタント教会の成立基盤であることは言うまでもない．しかし，それは同時に誤解されて，一方には人間の行為を軽視して，いわゆる自由主義や反律法主義を生み出し，他方この世と教会とは具体的な行為と生活とを要求してくるところから恐しく自律的，活動的となり，いわゆる「神の栄光のために」と主張しつつ，実は倫理的律法主義を生み出す傾向があったことを否定することはできないであろう．これはキリスト教が常に厳しく吟味することを迫られる大きな課題であり，説教の課題である．

18) P. T. Forsyth : ibid., p. 97.

19) コリント人への第1の手紙12章12-27節参照．その他ヨハネによる福音書15章1-11節参照.